

すれば、幾何學といふが如きものは成立し得ないであらう。點とは位置のみあつて延長もなければ厚さも無い。併し、紙の上に描いた一點には、尠くとも延長はある。線とは延長はあるが幅も厚さも無い。だが、我々は幅なき線を引くことは出来ない。眞知とは現實に感知するものの模寫ではないといふことの説明に、この幾何學の例はよく援かれるところである。

現實に物の姿を眺めるならば、それは凡て偶然の生起である。昨日まで晴れてゐたのに今日は雨が降る。先刻まで此の世に存在しなかつた赤坊が生れて来る。四十にして父と同じ白髪が生え方になつた。何れも皆突然の出來事である、之を突然であると見ないのは反省の力である。高い立場に自分を置いて、低い立場を抱擁するからである。簡単に片付ける人は心の貧しき人である、神祕を許し得る人は床しき人である。虚言

が世間に通用するから、正直でなければならぬといふ道德律が破れてゐると見る人は、寂しい人である。心の眼を、魂の耳を、聞き働かせたい。經濟法則や物理法則についても同様である。數學法則については、言ふだけ野暮か。

二 有教無類は人間平等觀である

現實に佇む人は、凡てを偶然であると観ずる。それは一つの見方に相違ない。併し、偶然はどこまで行つても偶然である、この偶然を擴充して法則にまで高めようとするのは、許し難き冒瀆である。自然主義が主義として主張せられるとき、既に理想主義に變じて居るといはれるのはこれに基づく。而も、かゝる現實に即した理想主義の、似而非理想主義たるはいふを俟たぬ。我々は、現實の背後に横はつてゐるところの姿を

捉へようと努力する。現實の人世を、矛盾と撞着との人世を、混濁と腐敗との人世を、この見方、この努力で洞察するとき、私は有教無類を憶ふのである。

論語衛靈公第十五の三十八に、『子曰、有教無類。』とある。教ありて類なしと訓ずる。蓋し、現實に人々を觀察するならば、賢あり愚あり、貴きあり賤しきあり、善人あり悪人あり、種々なる類の別を見るのであるが、かく類に差等あるは教育の如何に基くのである。差別の原因は教に存し、類の差別ではないといふのである。徹底的人間平等論の提唱であると私は理解する。

現状を直視するならば明かに有類である。有類であることを以て如何ともし難きものとする立場がある。私はこれを第一の立場と呼ぼう。第二の立場は、有教無類とその考方を根本的に異にしてゐることは、今更

喋々を要しないであらう。有類の現状を目して、過去の教育の結果であると斷じ、本來は無類なるべきだとする考方がある。これを第二の立場と呼ぼう。現状はなる程有類である、併し、教育の力によつて無類とならしめ得べしと將來に希望をかける考方がある。これを第三の立場と呼ぼう。現状の有類は、無類なるべかりしを誤れる教育によつて結果せしめしものなれば、將來に向つて無類の境地に入らしめようと企圖する考方がある。之を第四の立場と唱へよう。我々の思想生活、經濟生活並に政治生活、一括して社會生活に對する態度が、前述四つの立場に於て、如何に取扱はれてゐるかを簡単に展開しよう。

だが、それに先つて教育の何たるかを簡単に説明する必要があるやうに思ふ。Rousseau は彼の不朽の名著 *Emile* の巻頭に於て揚言すらく、*plants are formed by cultivation and men by education.* と。人は教育によつて人

となるのであるが、それは St. Hall もいつた如く、Selfdevelopment である。自己育成が教育の精髓であるから、教育といふものは、生れ出てから死ぬるまで続く。教育の主體はいふまでもなく自己である。その自己が環境のうちに育成の材料を求め、理想を實現しつつ自己育成の不斷の行を續ける。教師も學校も社會も自然も、自己育成者にとつては一の環境に外ならない。理想は教育の目的として、自己育成者によつて選ばれる。Münsterberg は Psychology and the Teacher に於て、Economics, and not physics, decides as to the bridge; Politics, and not geology, decides as to the tunnel; and Ethics, not psychology, must decide the ends to which education has to lead the child. というてゐる。教育の目的は、人生の目的そのものであるから、倫理學によつて決定されねばならぬといふのである。所謂教育者は、その目的選擇に當つて、選擇の力の弱き自己育成者を介補する役目を演ずるに過

ぎない。教育は自己育成者の理想の實現であるから、教育組織の低きに入り高きに進んだなどいふことは、何等の意味もなきことであり、世の文化の創造に寄與するの多寡によつて、はじめてその功績は評價せられるであらう。

三 理性にかへり得ざる者の悲哀

世相の現状を是認する第一の立場は、有教無類の思索外にあること前述の如くであるが、砂糖の甘さを引立たせる鹽の役目を演じさせる爲めに、これに一瞥を加へよう。この立場は現状謳歌であつてはならない。謳歌には理想を含むからである。必ずや、避くべからざる害悪として之を是認するものでなければならぬ。

私は Malthus の Principle of Population に現はれた思想を覗ふであらう。

『Adam Smith は、凡ての人が賞めて何人も讀まぬ本を遺したといひ得られるが、之と同様に、Malthus は、何人も讀まぬが、而かも、凡ての人が罵る本を遺したといひ得らるる。』と、Bonar が Malthus and his work に於ていうて居るさうであるが、私も讀まずして罵る一人であるかも知れな
 So. やつ、Malthus は、(イ)食物は人の生存に必要である、(ロ)兩性間の情慾は必要にして且略其現狀を維持すべし、との二つの法則は、固定の法則であつた、將來もさうであらう。而して、この前提にして眞ならば、『人口の力は土地が生活資料を生産する力よりも遙かに大なるものである。人口は若し制限なくば幾何的比例で増加するが、生活資料は算術的比例を以て増加するに止まる。』といはねばならぬ。併し、人口の増加は、(イ)必然的に生活資料によつて制限せられ、(ロ)生活資料にして増加するときは、有力にして且顯著な妨げによつて妨害せられない限り何

時でも増加する。だが、(ハ)人口の優れたる増加力は道德的抑制、貧窮及び罪惡によつて抑制せられるから、現實の人口は生活資料と平均を保つのであると説く。事情かくの如くなれば、Godwin や Condorcet などが、政治的方策に基いて人生の罪惡及び貧窮を除去し得べしと考へたことを、皮相の見として斥けたのである。Malthus によれば、現世の惡は致方なき自然法則の結果に外ならずと見る。かくて、經濟生活上の資本主義は擁護せられた。

資本主義擁護に屬する正統派中でも、J. S. Mill に至ると其趣稍々異つてゐる。生産上の法則は不變であるが、分配の法則は變化し得るといふた。こゝが、Marx をして、『彼 Mill の思想は、始めて醒めたる、而も未だ徹底せざる見解なり。』と呼ばしめたところである。

以上と異なり、何等原理の上に立脚することなくして現狀に満足して

ゐるものがある。所謂御都合主義と名け得る思想がこれである。この主義を奉ずる學者は即ち曲學阿世の罵倒を甘受せねばならぬであらうし、輿論に曳きづられて行く政治家は意氣地なしといはれても仕方があるまい。流行を追うて止むことなき教育者、枯薄の小唄を愛唱して流れ行く若人、皆理想なく志氣乏しく、御都合主義の阿流に過ぎない。

四 人間平等を退いて考へる態度

現状は有類である。不平等である、併し、これは過去の教育の結果であると推斷し、本來は無類なるべかりしものだとする第二の立場に眼を轉じよう。安井日南が、『類、繆播以爲知愚、皇侃以爲貴賤、朱子以爲氣習之殊、仁齋以爲母類之美惡。今案、類字之義、當兼四者、而習俗之移人尤甚。孔子見互郷之童子、即共事也。』というて居るのは、或はこの立

場にありといひ得ようか。これは反省の態度である。そして學者の態度である。決して實行家のそれではない。

文藝復興に於て我々は教會から我を回復した。回復した我は間もなく國家に囚はれた。佛蘭西革命は我を國家から解放した。佛蘭西革命の國家觀たりし民約説は理知萬能の思想であつた。随つて、理知の萬能から我を自由にせねばならなかつた。そして、我々はそれを Kant の「コペルニクス」的轉向によつて得たといひ得るであらう。西田博士は「社會と個人」に於ていふ、『普通に考へられる様な單に個人の團體といふ如き社會は、心理的個人と同じく、我々の認識對象界に屬し、我々の自由なる人格に對して、その材料となるのみであつて、その規範となることはできぬ。存在價值を有するのであつて、道德價值を有せない。自由なる人格的發展は唯時々刻々の自由なる現在意識にあるのみである。此點から見れば

社會も個人も同様である。所謂社會的内容も、個人的内容も、同様に現在の自由の意識に於て創造せられるのである。所謂個人的意識も種々なる表象の結合として、一つの社會といひ得る如く、我々の認識對象界に於ては嚴密なる個人といふ者はないと云ひ得るであらう。」と。個人に於ける我は、個人的なる我ではなく、超個人的なる我である。即ち他を許すことが自己を許すこととなるのである。

此立場は、現實に囚はれてはならない、現象に眩惑されてはならぬ、本當の姿は可想界に於てのみ把握し得るであらう、思索せよ。思惟せよ、そはだ、汝自らを知る唯一の道であると教へるのである。時世を白眼視して姿を竹林に隠し、清談を事として自ら高うする、亦一の處生觀に相違ない。併し、我々は首陽山の薇を食つて周の粟を食まず、遂に餓死した伯夷叔齊を學ぶには當らぬ。それで私は叫ぶのである、學者よ街頭に

出でよ、道學者よ社會人たれ。

五、人間平等を進んで實現せんとする態度

河上博士は、Kirkpatrickの言を紹介して次のやうにいうてゐる。「試みに銀行經營者の子供一百人と、工場主の子供一百人と、鑛山主の子供一百人と、更に大工の子供一百人と、機械職工の子供一百人と、鑛夫の子供一百人と、即ち三百人は資本家階級の家庭から、他の三百人は労働者階級の賤しき家庭から、同じ年頃の男女六百人を連れて來て、此等の子供をば同じ中學校に入れ、次いで同じ高等學校に入れ、且彼等の通學中は、労働者側の子供にも、資本家側の子供にも、同じやうに善い食物を十分に與へ、快い着物を着せ、善い住居に住はせ、放課後も同じほどの自由を得させて、その成績を観察したらば、労働者側の子供も資本家側

の子供と同じやうに、善い成績をあげ、善い點をとり、彼等と全く同じ分量、同じ品質の頭腦を有することを、證據立つるであらう。試みに此の如き實驗をして見たらば、諸君は必ず斯る結果を發見するだらう。否、實驗をしなくとも、諸君は必ず斯かる結果を發見すべきことを、承知してゐるだらう。多くの市や町や農村に於ける公立學校の記録は、屢々行はれたる精神試験によつて、勞役者の子供も雇主の子供も、頭腦に於ては共に平等であることを證明してゐる。」

以上は人間生活不平等の現状を、教育によつて打開し得べしとする有教無類第三の立場の一見解であるが、これは不平等の事實たると同じく、平等も亦事實たることを述べたに過ぎぬ。之に反し、伊藤仁齋が論語古義に於て、『此言天下唯有教之可貴、而無類之可言、教法之功甚大、而世類之美惡、不在所論、蓋人性本善、雖其類之不美者、然有學以免焉、則

皆可以化而入于善矣。此孔子之所以爲萬世開學問也、至矣大哉」と述べてゐるのは、教育の萬能を高潮したもので、その風格の高きを想見するのである。教育によつて現状の不平等は一掃せられて、平等の天日を仰ぐことを得るとするところに、その積極的意義を十分に觀取し得るであらう。既に述べた如く、教育は環境のうちにも充足物を求めて、自己育成を續けて行く過程そのものであつたのだから、自己育成者の心狀を正しくすることと共に、環境の整理によつても亦教育價值を高めて行き得るだらう。随つて、社會制度の改善の如き、茲に所謂教育の改善の概念に包含せらるべきことは言ふを俟たぬところである。論者、或は社會制度の改善を目して教育に非ずとするは、偏見たるを失はない。

私は、世間に所謂社會運動家と名付けられてゐる一團の人々は、大部分この立場に集うて居るものだと思ふ。精神主義的傾向の人達は自己育

成者の心状を云云し、物質主義的傾向の人達は環境の整理即ち社會制度の改善を問題とするの差あるのみである。而して、私が此の立場を想ふとき、夏目漱石の『野分』に出て来る白井道也先生の演説を回想する。「事實上諸君は理想を持つて居らん。家に在つては父母を輕蔑し、學校に在つては教師を輕蔑し、社會に出でては紳士を輕蔑してゐる。是等を輕蔑し得るのは見識である。然し是等を輕蔑し得る爲には自己により大なる理想がなくてはならん。自己に何等の理想なくして他を輕蔑するは墮落である。現代の青年は滔々として日に墮落しつつある。二聽衆は少しく色めいた。『失敬な』とつぶやく者がある。道也先生は昂然として壇下を睥睨してゐる。『英國風を鼓吹して憚らぬものがある。氣の毒なことである。己に理想のないのをに明かに暴露してゐる。凡ての理想は自己の魂である。うちより出でねばならぬ。奴隸の頭腦に雄大な理想の宿りや

うがない。西洋の理想に壓倒せられて眼がくらむ日本人は、ある程度に於ては奴隸である。奴隸を以て甘んずるのみならず、争つて奴隸たらしとするものに、何等の理想が腦裏に醗酵し得る道理があらう。諸君、理想は諸君の内部から湧き出なければならぬ。諸君の學問見識が諸君の血となり、肉となり、遂に諸君の魂となつた時に、諸君の理想は出來上るのである。附焼刃は何にもならぬ。』

魂の理想を抱きしめて現状の打破を獅子吼してゐる人は、果して幾人あるであらうか。第三の立場の弱點は附和雷同性の可能の蓋然率の頗る高きところに存する。かくて私は第四の立場に移り行かねばならぬ。

六 反省して本體を捉へた上之を實現せんとする 人間平等觀

朱熹の註にいふ、「人性皆善、而其類有善惡之殊者、氣習之染也。故君子有教、則人皆可以復善。而不當後論其類之惡矣。」先づ現在の不平等は氣習の染に過ぎず、本性は依然として平等なるを斷じ、進んで、この氣習の染は教育によつて脱却し得べく、それによつて本然の平等性は發揮せらるべしと説いてゐると見ることが出来る。孔子は論語陽貨第十七に於て、「性相近也、習相遠也。」というてゐるが、これはたゞ本來性相近きものなれど、習の如何によつて相遠さかるに至ると述べたに止り、進んで相遠さかつて居るものを相近からしめる積極的な主義を示しては居なす。即ち前説第二の立場に居る。又、同じく陽貨第十七に於て「唯上知與下愚不移。」というたのは、教育の力によつて平等の本性にかへさうとするときの妨げを述べたものであらう。即ち前述第三の立場の實際的困難を白狀したものと見られる。

Chambersの百科全書の舊版に、「長い不合理な生活をした人間として、後世に傳はるべき人である。」と書かれてゐるといふ Robert Owen は、英國に於ける労働組合、産業組合及び社會主義の父である。彼は A New View of Society: or, Essays on the principle of the formation of human character に於て、「どの様な品性でも、最も善いものから最も悪いものに至るまで、最も暗愚なものから最も賢明なものに至るまで、適當の手段を應用すれば、どんな社會にでも、世界全體にでさへ、之を與へ得るものである。しかも大なる範圍に於て、其の手段なるものは、人事に關し勢力を有せる人々の支配の下に在り、制御の下にあるものである。」といふ原理を自明のものとして認めてゐるといふことである。この原理には、人間は境遇の産物であるといふことと、人間の境遇は大部分人間自らによつて改造し得られるものだといふ二つの命題が含まれてゐると、河上博士は指摘し

てゐる。有教無類の第四の立場にあるが如く見えるけれども、Kantが『*Du kannst, denn du sollst*』といふやうな深みが足りないのは淋しい。『なさねばならぬからなし得る』といふ非論理的な命題は、理想の秘奥を極めたものみに許された境地であらう。花の顔柳腰といふが、Kantのやうに我を反省する人が、Owenのやうに實行に精進するのが、この第四の立場であるといひ得るであらうか。そして私は有教無類の眞義をここに求める。

無類とは平等である。平等とは現實の問題ではなく、根據の問題であり、理想の問題である。平等は嘘だといふ人は現實より見えない人であり、事實に規範を求めようとする人である。平等は高きものを引下げるものである、進歩に^さあらずして改悪であると難する人々は、高低や分量が問題とはなり得ない理想や根據を理解し得ざる人々の言に過ぎぬ。而

して、かゝる誤解の相當に廣い範圍に亘つて流布されてゐるのは、實に悲しむべき現象である。その悲しみの原因の一半は、恐らくは平等を説くものも亦負擔せねばならないだらう。

七 若人よ有教無類を貫け

如何にして平等を實現すべきかは教育方法論の問題である。私の理解するところにして誤りなしとすれば、政治は實に一の教育である。凡ての教育がさうであつたやうに、政治に於ても亦政治生活をなせる各人が、自己育成を續けて行かねばならぬ。政治家は實に政治教育に於ける一の環境たるに過ぎぬ。各人の理想選擇方向線が定まらぬ時代には、たゞその自己育成者の介補として、理想選擇の役務に關與するに過ぎない。凡ての教育家が自己の任務を知つて謙虚となつたと同じやうに、政治家も

亦謙遜であらねばならぬ。

だが、民衆は決して高慢であつてはならぬ。政治生活即政治教育を實現せんと欲する爲めには、惡戰苦闘を續けて行かねばならぬ。慢心は惡戰苦闘を回避する。併し、惡戰苦闘は人生の常相である。随つて、教育の唯一手段である。新たに施行せられた普選は、普選によつて教育せらるべく、決して他の所謂公民教育などで到達さるべきものではない。加之、公民教育は斷じて所謂政治教育そのものではない。

迂餘曲折の後に結論に來た。人間は平等である。現實の不平等からそれを疑つてはならない。否、疑ふのはよいことである。併し、疑ふことに徹しなくてはならない。疑に徹するとき、そこに必ず平等の來迎を仰ぐであらう。平等の根據を把んだかぎり、その理想の實現に躊躇してはならない。それが若人の意氣である。それが新人の欣びである。有教無

類を私はかく解するのであるが、それが孔子の眞意であるか否かは私の問ふところではない。最後に私は一句を捧げる。論語子 第九に『子曰、後世可畏、焉知來者之不如今也。四十五十、而無聞焉、斯亦不足畏也已矣』後世とは青年のことである。畏るべき後世諸君、Wernerが Simple Life のうちに於て述べたやうに、Simple Life and high Thinking, that is my ideal. 生活は簡に思想は高く、以て有教無類の實をあげらんことを切望する。

(大正一四、九、學習研究所載)

第九 温故知新二十題

一 教育とは忘れてしまつたあとに残る「あるもの」であるとさる詩人はいうた。「あるもの」とは何ぞやといふ問に對して、ある物知りは「判斷力」であると答へた。私は前者の含蓄ある表現を悦ぶ。

二 歎異鈔に、「親鸞は弟子一人も持たず候」とある。親鸞にして弟子一人も持たず候である、況んや我々をやであるが、さうかといつて、私は弟子一人も持ちませんとはいひ切れない。親鸞の境涯に達せずしてこの言を口にするのは、そはたゞ世に銜ふに過ぎないからである。

三 中勘助氏は「沼のほとり」に於ていふ。

「この世に己とまつたく同じ人間があるならば、それは到底堪えらるべくもないことである。私はたゞそれが私なるが故に己を愛するのである。」醜惡極まりなきものなるに拘らず、たゞそれが自分だから愛するのである。たゞそれが自分の子供なるが故に愛するのである。だゞそれが自分の教へ子なるが故に愛するのである。たゞそれが自分の國家なるが故に愛するのである。愛は論理ではない。

又いふ。

「赤城山ならの林の奥にしまめまき鳥をきけば悲しも。

私は死を望んではゐない。生を望んでもゐない。私が心から望むのは私が存在しなかつたことである。」自殺することによつて清淨になると思ふのは自惚れである。エゴイストである。自殺したからとて、罪惡を流し

つつあつた人間の存在は永久に消ゆることはない。その罪惡を清淨ならしめるものは、他人であつて自分ではない。

又いふ。

『彼自ら眞理を追及すると稱する人々、彼等は何故かやうに怯懦で卑劣なのであらう。彼等は何故欺瞞的な饒舌をやめて、私は何も知らないとはいはないのであらう。』私も實に自ら眞理を追及するものと稱し、欺瞞的な饒舌を弄びつつある一箇の怯懦にして卑劣なるものである。私は何も知らないといひ切りたい、本當に何も知らないのだから。併し、他がそれを認めては呉れない。他がこれを認めて呉れないことはどうでもいとして、私自身にそれをいひ切るだけの貫目がない。心から、私は何も知らないといひ放てるの日はいつのことであらうか。我が心寂しからざらんや。

四 西田博士は「善の研究」に於て、「メフィストフェレスが常に惡を求めて、常に善を造る力の一部と自から名乗つた様に、惡は宇宙を構成する一要素といつてもよいのである。固より惡は宇宙の統一進歩の作用ではないから、それ自身に於て目的とすべきものでないことは勿論である。併し、又何等の罪惡もなく何等の不滿もなき平穩無事なる世界は極めて淺薄なる世界といはねばならぬ。罪を知らざる者は眞に神の愛を知ることにはできない。不滿なく苦惱なき者は深き精神的趣味を解することはできぬ。罪惡、不滿、苦惱は我々人間が精神的向上の要件である。されば眞の宗教家は此等の者に於て神の矛盾を見ずして反つて深き神の恩寵を感じるのである。此等の者あるが爲に世界はそれだけ不完全となるのではなく、反つて豊富深遠となるのである。若し此世から盡く此等の者を除き去つたならば、嘗に精神的向上の途を失ふのみならず、いかに

多くの美しき精神的事業は亦之と共に此世から失せ去るであらうか。」といつて居られる。悪のない社會は素漠たるものであらうが、悪は之を目的とは出来ない。なくてはならないものであつて、而も、それを以て目的として精進することの許されないものは多い。私はその一つとして性教育を思ふ。

五 丸ビルの頂上の一角に立つて働いてゐる人達を見たときに、私は愕然として我が身を省みた。恐らくは、教育者の視て以て品行方正なる模範生のうちから彼等は出でなかつたであらう。然るに、かやうな修身教育の異端者なしには、現代文化を象徴する摩天樓は現はれ得ないのである。教育者が厄介視して、放校退學の極刑を科したところの人達が、我々に文化を享樂せしめる爲めに渾身の努力を捧げて呉れるのを想ふ時、

私は人間禮讚の本義を掴み得るやうに思ふ。罪を憎んで人を憎まずとはよくいうた。併し、人を離れて罪のみを考へ得られないのだから、罪を憎むことはやがて人を憎むことでなければならぬが、憎むべき罪と人とのうちに潛むところの神性は、燦としてその光を放つ。その光に回向することが人間禮讚に外ならない。

六 信ぜられる者は幸福である。併し、信ずる者はより幸福である。讀本にある『白雀』の話は、信ずることの幸福を描いたものである。信じたが爲めに瞞された者の心境の美しさを寫したものである。白雀の主人公は、その友人から世に白雀といふ害鳥が居ると欺かれたのであるが、友人を信ずること厚き彼は、その欺かれたるを知らずして、翌早朝に白雀を見ようとして反つて雇人の不正を發見した。後に友人に出逢つたと

きには、その瞞されたものなることを知り、而も、友情の限りなく深きに感泣して握手した。僅かばかりの科學的知識なるものを振りまはして、白雀の存在を否定しなかつたことを尊く思ふ。

七

韓退之の『與孟東野書』は、『與足下別久矣。以吾心之思足下、知足下懸々於吾也。』といふ文章からはじまつて居る。君と別れること久しきに及ぶが、僕は常に君のことを思つてゐるとは誰でもいへる、自分の心持だからである。併し、友人の氣持を忖度して斷固として、君も亦僕を思つて居て呉れるに相違ないといひ切れるものは蓋し尠いであらう。君はさういつても僕はさうは思つては居ないよといはれさうだからである。信ずるの厚きこと親子の如きに至れば、左様にいひ切ることは尋常茶飯事である。私はかやうに考へるたびに、菊池寛の『父歸る』を思ふ。

八 私に結婚したときに、能勢朝次君が「ワグネルが愛を歌へるトリスタンとイソルデの一句を録して君が新婚を祝す。」と題して、松浦一さんの『文學の本質』を呉れた。

トリスタン「君はトリスタン、我はイソルデ、

もはやトリスタンならで。」

イソルデ「君はイソルデ、私はトリスタン、

もはやイソルデならで。」

兩

人「名なく、別離なく、

新なる認識、新なる情熱、

無限永久の一つの心、

燃え立つ胸の至上の戀。」

能勢君が『文學の本質』に録して呉れたのは、兩人が異口同音にいふ部

分の原文獨逸語である。英語では妻君のことを One's better Half ともいふが、良夫も妻君にとつては「よりよき半分」であらう。夫の半分が妻から出来上り、妻の半分が夫から出来上つて居るとすると計算が可笑しくなる。夫の半分が妻だから、妻の半分たる夫は夫自身の四分の一となり、その四分の一の夫の半分が妻だから、妻の半分たる夫は夫自身の十六分の一となる。かやうにして無限に連続する。これは非論理である。夫が妻であり、妻が夫である、お前がわたしで、わたしがお前である、それが一つである。その半分といふのはたゞ比喻に過ぎない。

九 西博士は、「倫理學の根本問題」に收められた「結婚の眞理」に於て、夫婦の關係を説いていはれる。「向ふを夫とすることによつて自ら婦となり、向ふを婦とすることによつて自ら夫となる。するとは實地を踏

んで實行することである。なるとは自己を創造することである。すべての他の道德的關係に於ての如く、夫婦の關係は與へられるもの又は認識せられるものではない。夫や婦が與へられるのではない、夫と認識し婦と認識するのではない。夫を創造し婦を實現するのである。」創造するとは信ずることに外ならない、信ずることは力であるからである。信なき夫婦の如何に寂しきかは、ストリンドベルヒの「父」に於て之を見る。大尉夫婦は娘ベルタの教育についての意見の相違から、妻は、娘は夫の子ではないといふ、そして夫は遂に狂死するのである。

ラウラ「アドルフさん、あなたはあなたの子供に會ひたいと思ひですか。」

大尉「俺の子供に？男には子供がない。子供があるのは女だけだ。それだから俺達が子供を持たずに死ぬ時に、未來は女のもの」と

なる。嗚呼神よ、子供を愛する神よ。」

十 ドストエフスキの「虐げられし人々」に、娘に駈落ちせられた老婆が娘可愛さの餘り娘の寫真入りのメダルを持つてゐたのであるが、或る日それを紛失した。處が、娘の家出を心から憤つてゐるかのやうに見える老人の財布に、それが仕舞ひ込まれてゐたことが後になつてわかつた。その時のことである。

「彼はメダルを取上げて、それを力任せに板の間の上へ投げつけて、氣でも狂つたやうに足で蹂躪つた。「何時までも、何時までも、俺は呪つてやる。」と彼は喘ぎながら呻いた。「何時までも、何時までも!!」

「あらまあ!!」と老婆は叫んだ。「彼女を、彼女を!! 私のナターシャを!! 彼女の顔を足で踏むなんて!! 足で!! この亂暴者!! 無情者!! 酷たらしい強

情ッ張!!」

妻の叫びを聞くと、夢中になつてゐた老人は、自分の爲たことが怖ろしくなつた。急に彼は板の間からメダルを拾ひ上げて、室の外へ駈け出した。が、二歩歩いて彼はバタリと跪いて、自分の前にあつた長椅子に掴まつたまま、ぐつたり力なささうに首垂れて了つた。

彼は女子供の様に泣き喚いた。慟哭は張裂けるやうに彼の胸に逼つた。と、老人の恐ろしい權幕は忽ち子供よりも弱々しくなつた。最早彼は呢ふことなどは出来なかつた。それどころか、今は誰憚らず、私達の居る前で、つい今まで蹂躪つてゐた肖像を夢中になつて止め度もなく接吻するのであつた。恰度今迄長い間堪えてゐた、娘に對する凡ての優しさ、凡ての愛情が今抑へ難い力で迸り出て、其の激越の勢に彼の全身は破裂したかのやうであつた。」

こんな状態であるのに娘を許すのかと問ふと、

「いや、いや!!決して、何時までも!!」と老人は噎れた切ないやうな聲で叫んだ、「何時までも!!何時までも!!」

親が子を憎むのは、「憎しとて叩くにあらず笹の雪」である。母性愛を體驗してゐる女の先生より、若い純な女の先生のうちによき先生を見出すのは、自分の子供に對する絶對愛が、學級の子供に對する絶對愛を妨げることがないからであらう。

十一 西田博士は、藤岡博士の『國文學史講話の序』に於ていはれる。「死にし子顔よかりき、おんな子のためには親をさなくなりぬべしなど、古人もいつたやうに、親の愛はまことに愚痴である。冷靜に外より見たらば、たわいない愚痴と思はれるであらう、併し、余は今度この人間の

愚痴といふものの中に、人情の味のあることを悟つた。カントがいつた如く、物には皆値段がある、獨り人間は値段以上である。目的其者である。いかに貴重なる物でも、それは唯人間の手段として貴いのである。世の中に人間ほど貴い者はない、物は之を償ふことが出来るが、いかにつまらぬ人間でも、一のスピリットは他の物を以て償ふことは出来ぬ。而して、この人間の絶對的價值といふことが、己が子を失うたやうな場合に最も痛切に感ぜられるのである。ゲーテがその子を失つた時、*„O ver the dead“* といつて仕事を續けたといふが、ゲーテにして此語をなした心の中には、固より仰ぐべき偉大なるものがあつたであらう。併し、人間の仕事は人情といふことを離れて外に目的があるのではない、學問も事業も究竟の目的は人情の爲にするのである。而して、人情といへば、たとひ小なりとはいへ、親が子を思ふより痛切なるものはなからう。徒

らに高く構へて人情自然の美を忘るる者は反つてその性情の卑しきを示すに過ぎない、征馬不前人不語、金州城外立斜陽の句ありて乃木將軍の人格が仰がれるのである。』私は既に四人の子の父である。未だ子を喪うたことはないが、西田博士のこの序文を、涙なしには読み得ない一人である、而も、読みたくてならない一人なのである。

十二 親の愛は反對給付を要求することのないものである。恩を施すことを意識せざるものである。犠牲を拂つてゐるとは思はぬものである。ペスタロッチが貧しき子供の群れと起居を共にしたことは、彼にとつて本當の仕事をしてゐる氣持で一杯であつた筈である。ツライけれども子供達の爲めに苦勞をしてゐるといふ意識が毫しでもあつたとすれば、私はペスタロッチの偉大さを疑ふ。キリストについてもさうだ、十字架上

で刺殺せられるときに、讚美歌を歌つてゐた氣持を氣高く思ふ。萬民の犠牲になつて我今茲に死すなどいふ誇張がないのでキリストである。併し、我々はペスタロッチを尊敬し、キリストを崇拜し、彼等の恩を感じる。そして、萬民の救ひと主と呼ぶのである。恩を恩とするものは、恩を受けたものであつて、施したものであつてはならない。私の乏しい経験の限りでは、師の恩といふことを教壇の上から説くことほど困難なこととはなかつた。いつも、私が諸先生に感じてゐることを述べるに止めた。

十三 シエークスピヤの『ヴェニス商人』に於て、ボオシャが戀人パッサニオを助けんが爲めに、變装して裁判官となり、猶人なるシャイロックを散々に打負かした後、パッサニオから『謹んでお禮を申し上げます、わたくし並にわたくしの信友は、今日、閣下の賢明な御裁判によつ

て、一命にかゝはりまする料料をまぬがれました。つきましては、猶人に遣しまする筈の此三千兩を、喜んで閣下に献上いたしましたして、聊か御厚志に報ひまする當座の章といたしまして……」といはれたときに、「自分で満足してをる者は、既に報酬を得てをるのです。わたしは貴下を救ひ得たので自ら満足してをるのですから、すなはち最早己に報酬を得てをるのです。わたしは曾てそれ以上の報酬を望んだことはありません。どうか又お目にかゝる時分にお見知りおきを願ひます。御機嫌よう。これでお別れいたします。」と答へてゐる。自ら満足しゐる者は、既に報酬を得て居る、我々が我が教へ子に對して、此の氣持が持てゐるならと思はぬ日とてはない。寂しき我々よ。

十四 薄田泣菫の『茶話』に『慈善家の心得』といふ話がある。

『鎌倉の圓覺寺に、誠拙和尚といふ坊さんが居た。ある時三門を拵へようとして、弘く佛縁のある人達から寄進を募つた。すると、その頃札差をしてゐた梅津傳兵衛といふ男が、心ばかりの寄附につきたいからといつて和尚を訪ねて來た。傳兵衛は膨まつた懷中から嵩高な金包を取り出して和尚の前に置いた。

「和尚様、ほんの聊かではございますが、ここに金子が五百兩ござりまするから、今度の三門の御建立へ是非お加へおき下さいまするやうに。」和尚はちらと金包を見たが、

「あゝさうかい。」

と言つたきり、直に眼を外つ方に逸らした。

傳兵衛は不平で堪らなかつた。五百兩といへばなかなかの大金で、これだけあつたら女一人の魂を買ふ事も出来るし、男の運を買ふ賭博を打

つ事も出来るのだ、それを知らない和尚でもない筈だ。と、傳兵衛は慥う思ひながら、態と覗き込むやうに和尚の顔を見た。

「ほんのぼつちりでは御座りまするが、五百兩だけ御寄進申し上げまする。」

「さうか、よしよし。」

和尚はまた一言言つたきり矢張り外つ方に向いて素知らぬ風をしてゐた。

傳兵衛は幾らか腹に据えかねた。幾ら出家の身とは言ひながら、他人から寄進を貰つて、あの素振は蟲が善すぎる。五百兩といへば、かなりな大金だ、自分がこれだけの金を儲けるには額に玉のやうな汗も流した。嘘も幾度か吐いたが、夫を今惜氣もなく寄附しようといふのだ。和尚はそのお禮として、來世で自分に特別上等の居所を取持つてくれる程の信

用はないにしても、今少し叮嚀な挨拶があつても宜かりさうなものだ。と傳兵衛は少し言葉に角を立てた。

「和尚様、五百兩と申しましたところで、當山におかせられましたは何のお役にも立ちますまいが、私にとりましては、聊か身分に過ぎた寄附かと存じます。就きましては何か一言の御挨拶を下されましても……」

「禮が言つて欲しいと言ふのか。」

此方向きに向き直つた和尚の眼は、蠟燭のやうに光つた。

「御意にござりまする。」

傳兵衛は木兎のやうに頬を膨らませた。

「馬鹿な。お前が善根するのに、なぜまた俺が禮を言はんければならぬのか。」

和尚の聲は挽臼のやうに上から落ちかかつた。その下に壓し潰された

お伽譚の猿公のやうに、傳兵衛は疊に顔をすりつけて眼を白黒させた。

そんじよそこらの慈善家もよく心得てゐて欲しいものだ。」

私は最後の一句はちと蛇足だと思ふ。この心得を持たねばならぬものは、何も慈善家には限らないからである。嘗て一日一善といふことが流行したときに、私の教へてゐた尋常三年の一兒童はちつともそれを發表しない。聞いて見ると、廊下に落ちてゐる帽子を帽子掛けにかけたり、坂道に苦しむ車の後押しをしてやつたりなどすることは、私だつて人に負けずにやつてゐるが、私はあんな行爲は「あたりまへ」の行爲であつて善行とはいへないと思ふから、別にまだ善行はしないで居ると答へた。私はギクリとした。それ以來一日一善はやめにした。「あたりまへ」のことが行はれなくなると、その「あたりまへ」のことが善行に早變りするが、純な子供には物の本當の姿を眺めさせたいと思ふ。

十五 孝經の「諫争章第二十」に、

「曾子曰、若夫慈愛恭敬、安親揚名、參聞命矣。敢問、從父之令、可謂孝乎。」

子曰、是何言與、是何言與、言之不通也。

昔者天子有争臣七人、雖無道不失其天下。

諸侯有争臣五人、雖無道不失其國。

大夫有争臣三人、雖無道不失其家。

士有争友、則身不離於令名。

父有争子、則身不陷於不義。

故當不義、則子不可以不爭於父。臣不可以不爭於君。故當不義則爭之、

從父之令又焉得爲孝乎。」

とある。父のいひつけに従ふことが孝行であるかとの曾子の問に對し、

これ何の言ぞや、これ何の言ぞや、無意味なことを聞くものかなと一蹴せられたところに孔子の深さを見る。そして、儒教の決して消極的なものでないことを明かにし得ると思ふ。宜なり、田島博士は、「後世ニ遠ンデ孔孟ノ教ハ遂ニ其ノ精神眞髓ヲ失ヒ徒ラニ枯形殘骸ヲ存シテ却テ時勢ノ進運ヲ妨グルニ至リタルナキヲ保セス嗚呼是レ學ブ者ノ罪ナリ教ノ罪ニ非ザルナリ」と慨歎してゐられた。

十六 論語の「學而第一」に、「子曰、不患人之不己知、患不知人也。」とある。信ぜられざるを歎ずるの前に、信じ得ざるを悲しまねばならぬ。現代は澆季であるといひ、人情は紙よりも薄いといふが、私は昨夏未だ嘗て面識なき運轉手の手に私の全生命を托して、奥羽の脊梁山脈を自動車で乗り切つた。運轉手の手元が一寸でも狂つたなら、私は千仞の谷底

に屍を横たへねばならなかつたのである。散髪屋に行つてはいつも私は居睡りしながら髭を剃つて貰つてゐるが、誰か中村吉藏の「剃刀」のやうな目に逢はぬと斷言し得るであらうか。かやうに我々は他人を信じて生きてゐるのである。それが社會生活である。人を見たら泥棒と思へといつたのは昔のこと、主人が毒見をして見てからでなければお客が箸をとらなんだのも昔のこと、今は信を中心として生きる世である。それにも拘らず、我々は些細なことについて信に徹し得ない。生命について信じ得るものが、金錢について信じ得ないといふことは、悲しむべきことといはねばならぬ。

十七 論語の「爲政第二」に「子曰、學而不思則罔、思而不學則殆。」とある。又、「衛靈公第十五」に「子曰、吾嘗終日不食、終夜不寢以思、無

益不如學也。」ともある。又『中庸』に「誠之者擇善固執者也。博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之。」とある。博學、審問は之を學に約し、慎思、明辨は之を思に約することが出來よう。而して、結局は天の道なる誠を、人の道として實現する篤行の前提をなすものであらう。文化財を移入することが學であり、文化を創造することが思であり、文化を移入し創造する全過物を動きの儘に觀するとき、そこに篤行があるのであらう。學ぶことを知つて思ふことを知らず、思ふことを知つて學ぶことを怠り、學び且思ふもそれを綜合の姿に於て把捉する篤行を識らざる者は、遂に教育者としても將又被教育者としても、その存在の理由を失ふであらう。新奇を逐うて寧日なく、人を知る前に人に知られんと醒醒せる教育界にあつては、上述の如き箴言は、程子がいうたやうに『頤自十七八讀論語、當時已曉文義、讀之愈久、但覺意味深長。』である。

十八 論語の「雍也第六」に、「冉求曰、非不說子之道、力不足也。子曰、力不足者、中道而廢。今女畫。」とある。冉求が先生の道は悦んでは居りますが、どうも私の力が足りないものですからといふのに答へて、力の足りないものは成就覺束ない、併し、汝は自分勝手に出來ぬときめてかゝつて居るが、それはつまらないから止めよと孔子がいはれたのである。『女畫』、お前は勝手に柵を設けてゐるといふことは痛い。不能と困難とは異なる。事の前には不能なく、ただ困難あるのみ。事の終つた後に自分には不能でしたといふべきである。私自身もその一人であるが、世間には困難と不能とを混同して、事前既に不能と決めてかゝるものが多い、殊に女にはそれが多いやうである。自ら畫くものは一步もその外に出づることを得ない。叩けよ、然らば開かれん。

十九 孟子の『告子章句上』にある、『天將降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身。行拂亂其所爲、所以動心忍性曾益其所不能。人恒過然後能改、困於心、衡於慮、而後作。徵於色、發於聲、而後喻。入則無法家拂士、出則無敵國外患者、國恒亡。然後知生於憂患、而死於安樂也。』は、修身の時間に萱場今朝治先生から教はつたことであるが、今に至るも尙忘れられない。併せて思ひ出でられるは、刈谷無隠先生が、論語『學而第一』の『子夏曰、賢賢易色、事父母、能竭其力、事君能致其身、與朋友交、言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣。』の『賢賢易色』を賢を賢として色を輕んじと訓讀するを笑つて、『色は誰でも好きですわネ、色を好くほど賢人を好くといふことですわネ、アハハハ。』といはれたことである。修身教育は學校だけの修身であつてはならぬ。永久の生命に輻射するものでなければなるまい。

二十 嘗て他校へ榮轉する友人に饒別の辭を求められて、その一人には何もいふことなしといつた。校長となつて仕事をするには、融通無礙でなければならぬ、私の言を信ずれば言なきに如かず、信ぜられざればいふ迄もなきことであるからである。他の一人には、『碧巖集』のうちの一句、『日々是好日』と書いて上げた。日々是好日、日々是好日、これ程私の好きな句はないが、それだけ又何もいつて居ないのと同じであらう。所詮は私の腹は今米の飯を要求してゐるのである。

(大正一五、三、三一、郷里にて)

跋

一 わたくし

▲「樫の實」といへば思ひ出す歌があります。

思ふ存分はびこつた

山のふもとのしひの木は

根もとへ草もよせつけぬ。

山の中からころげ出て

人にふまれた樫の實が

しひを見上げてかういつた。

「今に見てゐる僕だつて

見上げる程の大木に

公民教育私論

一わたくし

なつて見せずには置くものか。」

何百年かたつた後

山のふもとの大木は

あのしひの木か 樫の木か

私はこの歌を此上もなく好みます。そして此の歌を誦するたびに、何だか涙ぐましい、而も感激にみちた感情のあふれ出るのを押へることは出来ません。

▲ジョン・スチュワルト・ミルが、彼の自叙傳に書いてある次の言葉も私のすきなもの、一つです。

"A pupil from whom nothing is ever demanded which he can not do, never does all he can." (不可能なことを要求されたことの無い子供は、決して全力を發揮するものではない。)

ミルは一八〇六年五月に英國のロンドンで生まれました。父はジェムス・ミルといふ、哲學者、政治學者、歴史家、經濟學者として有名な人でありました。この父からミルは三才の時希臘語を習ひました。まあ日本にいへば漢文を習つたといふやうなものです。そして六七才頃迄に、四書五經ともいふべき、ヘロドタス、ゼノフォン、ソクラテス、プラトン等の文章を読み終へました。英語の方はそれより前から習つていたので、算術も毎日習つてゐました。八才の時から更に羅典語をはじめ、十二才の頃には羅典の古典を殆ど読み終へてゐました。又其間に幾何學、代數學、論理學を父から學んだのであります。十三才で經濟學を學び、十四才で佛蘭西へ留學しました。いはば十三才で大學の課程を終へたのであります。過去百年間の英國の學者について偉人をあげる者ならば、誰でも間違なしに彼を其の一人としてあげるであらう程の大學となつたミ

ルの子供時代の様子は、ざつと右の通りであります。

▲私は此間男の子の父となりました。そして又ミルの父を思ひます。ミルは自叙傳でいひます。

『私の父は、凡て物を教ふる場合に、常に私の爲し能ふ所の極度を要求したばかりでなく、到底私の力では不可能なことまでよく要求をしたものである、併し父自身も亦、私の教育の爲には實に耐へ難きことを忍んだものである。現に私は希臘語の學科を下讀する時には、父と同じ部屋で、しかも父が物を書いてゐるのと同じ机で、凡ての事をした。しかるに當時は希臘語對英語の辭書は無く、只希臘對羅典の辭書があつたばかりだが、私はまだ羅典語を學んでゐなかつたから、是も利用することは出来なかつた。そこで私は自分の知らぬ字に出逢ふ毎に、一々之を父に聞くより外仕方がなかつた。父は最も癡癡の強い人間の一人であつたが、

よく此の如き絶間なき妨害を忍び、かゝる邪魔を受けつゝ、其間に在つて歴史や其他種々の著作を脱稿したのである。』

▲私の父も母も健在であります。祖母は私の生れて間もない頃になくなりましたので顔さへ知りません。祖父は耳は遠いが九十一の長壽を保つてゐます。(註、今や既にな妹が一人、それは既に二人の母となつて居ります。

▲私の小さい時は平安な日が続きました。母の里に子がなかつたので、殆ど自分の家と母の里との二軒に共通の子供であるかの様に見えました。よく母の祖父、それはまだ健在でありますが、(註、この祖父も一昨年逝にっ
れられて縁日参りをいたしました。途々川さへ見れば道端の石を拾つて
投げこんで祖父を弱らしたそうです。頭が少しばかり出て奥深く埋つて
ゐる石を起こさうとして失敗しては、『此石には根がある』といつて瘦我

慢を張つたことは、今でも薄々覚えてゐます。

▲妹が出来た頃には、妹の子守と下女、それは私の守であつたのが其儘居残つてゐたのですが、とが、勝手によく喧嘩をしてゐるのを見ました。併し、どちらもしかし善良な女で、蔭日和なく私を可愛がつて呉れたことを感謝してゐます、一人は大阪で有福に暮してゐますが、一人は郷里で不幸な日を送つてゐます。私がどこかで一家を持つて自活するやうになれば来て貰ふことに此間歸つて約束しました。

▲母は實際善良そのものゝ様な人です、ですからいつも損ばかりしてゐます。人の爲め、可愛さうな人の爲めには、實際どんなことでもして上げてゐるのです。國から國をめぐりあるく遍路さんなどの宿は、いつもいつもしてあげるのださうで、私が休暇にかへるたびに禮狀の來てゐるのを見ます。母を通して女といふものを見てゐる私は、女の人を尊い者

だと思はずには居られません。母は私に女、特に人の尊敬すべきことを教へて呉れました。

▲父は祖父の末つ子であります。二十四五才の頃から村の名譽職について色々の仕事をしてゐました、其間に大分酒も飲む様になつたのです。そして色々の不幸を重ねた結果、親から譲られた財産をすりへらして、二回までも財産整理をせねばならなくなりました。併し、これは單に父のみの責任とはいひ得ません。酒を飲むといふことゝ、それに存外恬淡だといふ父の氣質が手傳つて、運のまはりあはせでこんな結果を産んだのです。父は、私達二人の子供の教育には注意してゐて呉れました。私などは未だ一度も叱られたことはありません。勉強のことなどでも、押しつけがましく干渉を受けたこともありません。師範學校在學中などでも、金を貰ひたいといつてやれば、何に使ふのだといふことすら一度も

聞いた事がありません。私を信じてゐて呉れる父を思ふ度に、涙ぐましいうれしさを感じます。財産などはなければならぬで済みます、私は時に惜しいことをしたと思はぬでもありませんが、少し高價な教育費であつたと思つて、心中寧ろ一種の痛快味を感ずることもあります。父は私にとつて何物にも換へ難いものです。

▲私はかゝる父と母とを持つてゐることを、世にもかへ難き誇りとして語り得ることの愉快を、心から感謝してゐます。凡ての人から見離されることがあつても、私の父と母とは私を離れません。斷じて離れません。私一人の行動は、單に私一人の行動ではありません。親子三人連れの旅路です、私が一步を進める時、父母も亦一步を進めてゐます、私が溝に陥り込む時、父も母も溝に落ちてゐるのであります。ぼんやりしては居られません。

▲師範學校を出た者が、大學に入るといふことには因縁がなくはなりません。實は小學を卒業する前には、中學校へ入れて貰ふ筈だつたのであります。併し、家の第一回整理に相當した時なので、經費の都合で師範學校へ入つたのです。十年たてば元の通りになるのだから、暫く辛棒しろといふ譯だつたのです。併し、丁度十年たつた時には、元になるどころか、第二回の整理を必要としました。私よりは小學校で二級上であつた友達は、二年も前に醫學博士になつてゐます。二年後の今日、私はまだ一介の貧乏書生であります。

▲卒業と同時に附屬小學校の訓導となつた私は、『靴磨きとなつては英國第一の靴磨でありたい』といったグラッドストーンの言に大層感銘しました。草履取として天下第一等であつたからこそ、秀吉は後に天下を統一したのだといつも思つてゐました。今でもさうだと確信してゐます。

先生をしてゐる間約八年半、不平もなく不満もなく暮してゐました、一脈の野心は、決して私を不平や不満に沈溺させはしなかつたのです。其間に教育と修身と法制及經濟の中等教員免許狀を得ました。そして遂に大學の選科に入り、昨年九月入學檢定試験に合格して本科生となりました。目下第二回生の終了試験を三月四日から受けんとしてゐます。

▲私の學問的生活については忘れ得ぬ先生が尠くとも四人あります。一人は京都市第二錦林小學校長の森貞亮先生（註、今は京都市外修學院に閑雲野鶴を友として裕々自適してゐる）であり、一人は和歌山縣師範學校校長萱場今朝治先生（註、現鹿兒島第一）であり、一人は東京高等師範學校教授日田權一先生（註、現に東京高等師範學校附屬小學校主事を勤めてゐる）であり、他の一人は長野縣師範學校教諭小山保雄先生（註、現野縣屋代中學校長）であります。父母は私の私的生活の根基であります。四先生は私の學問的生活の動力であります。私の學問的生活は、實に此の四

先生に對する感謝の生活であります。私は茲にこれを斷言し得ることを、何物にも代へ難き無上の光榮とするものであります。

▲森先生は、私が師範學校入學の時から三年迄は學級主任として、附屬小學校時代は首席訓導として可愛がつて呉れました。忘れもしない、丁度私が一年生の第二學期末に、成績を聞きに舎監室へ行つた處が、行きなり『貴様は存外成績が悪い』といはれたので驚いて『何番位ですか』と伺ふと、『三番だ』と答へられた。それで『三番ならよいぢやありませんか』と、つい口を迂らすと『それだからいかん、貴様にはもつと出来る素質がある、三番では悪い、きばれ。』と仰つしやいました。實際、あの時のやうな感激に満ちた心持はさう度々はあり得ません。それで第三期二期二番、二年からは一番となつて、それ以來先生に叱られないで済みました。學校を卒業してから特に近頃に至るまで、如何に私が先生に愛

せられ信ぜられてゐるかは、とても筆紙の盡し得る處ではありません。

▲萱場先生は、師範學校時代の舎監長であり、修身の先生でありました。恐ろしい先生として在校中は縮み上つてゐたものです。三年の時だつたか、私が居睡りをしてゐると、先生が復演の爲めに、私に「今いつた所を説明してみろ」といはれたのでびつくりして説明をすると、間違つてゐるといつてさんく叱られた。實は、先生の仰言つたことは知つてゐたのだが、たしかにあれは誤謬だと思つてゐたので、正しいと思ふことを述べたのでした。それで其の譯をいふと、先生がそれでは私も考へ直してみますと仰言つたが、何でも其時の私の修身の點が百點であつたその後で聞きました。其後、私に大學へ入る様に鞭撻して下さつたのは、實に先生であつたのであります。今でも先生に逢へば恐ろしい氣がしますが、又、そこに言ひ知れぬ親しみを感じます。本當に私の事を思つてゐ

て下さる御厚情には涙が出ます。いつも下さるお手紙は、私をして何かせねばならぬぞと刺戟して呉れます。

▲日田先生は、私の英語の先生であり、教育の先生でありました。教生の頃は主事として、私一人の爲に半日位は特別に指導して下さる事もありました。先生が東京へ行かれるのと、私の卒業とは同時だつたものですから、訓導時代の主事としては仕へませんでした。後任主事の小山先生に伺ふと、附屬小學校の引繼事項のうちに私といふものが入つてゐるといひます。私はそれを聞いてどの位うれしかつたか、其後も東京へ行けばいつも必ず御邪魔してお話を伺つて來ます。いつも下さるお手紙には、學兄としてありますので恐縮してゐます。

▲小山先生は主事として三年間仕へた先生です。人をボロクツにいふのが好きで、私なんかも散々罵倒せられました。師範の卒業生は、偉大な

未成品でなければならぬといふ主義を抱持してゐられたので、卒業後間もない私などは、殆ど人格などありさうには見えぬやうな待遇を受けたものであります。私が昔のやうに引込思案でなく、主義の爲には所信を枉げないといふ様な氣持になり得たことについては、偏に、小山先生のお蔭であるといふ事を否定は出来ません。先生は後になつて、『貴様について一つ見込をつけてゐる處がある。それは貴様の弾力性のあるといふことだ』と仰言いました。『貴様が其弾力性を失はない限り、何かやるだらう』と激励して下さいました。私は先生に指摘せられた弾力性といふことについては、今に至るまで常に考へさせられてゐます。先生は長野縣人です。

▲わたくしが私自身を描かずに、私を生んで下さつた周囲を描いたことには、別に深い意味はありません、私は、私が今後如何様になり行かう

とも、それは皆私の周囲が私をしてさうなるやうにして呉れるのです。誰かもしふ通りに you never can tell. (明日のことはわかるものですか)です。私があゝ感謝の生活を續けてゐるのだ、ミル父子の心を心として歩みを續けてゐるのだ、たゞそれだけのことを知つていただければそれでよいのです。

▲最後に私は最もすきな小唄をつけ加へます。

思ひ出せとは忘れることよ、
思ひ出さずに忘れずに。

(大正一〇、二、樫の實所載)

二 辿り來し途

一

私の生涯は感謝の記録である。このことは公私の兩生涯に就いて言ひ得る。感謝の対象は第一は兩親であり、第二は先生、第三は親友である。兩親については言ふだけ野暮、先生では森、萱場、日田、小山の四先生の印象は特に深い。中でも森先生は先生といはんよりは寧ろ親だといふ氣がする。親友では何といつても同期生諸君が一番である。いつも私のことを自分のことであるかのやうに思つて鞭撻して下さる御同情に對しては、たゞ感泣の外お禮の申上げ様もない。私が若し將來何か少しでも仕事が出来るとやうなことがあつたなら、凡てこれ私の感恩奉謝生活の實

現に過ぎない。私は此頃切に私のやつて居る仕事の、感謝の生活の實現だなどといふには餘り貧弱であることを悲しみつゝある。

二

私には兩親もあり、妻も子もある。子供は二人、長も次も男である。兄を春樹といひ、大正九年五月生であり、弟を文雄と呼び、大正十年十一月生である。(註、大正十二年三月長女素子を得、大正十五年三月次女哲子を得た。)結婚したのは大正七年十二月であるから、相當な收獲と言ひ得よう。此間まで、塔の段なる志田博士邸内の率性堂と名づくる和洋折衷の氣の利いた家に置いて貰つて居たのであるが、今は下鴨の住人となつてゐる。電車に遠いので少し困る。下鴨といへば私の下宿生活の凡てを送つた處である。前半は河崎町の小辻方で、後半は下川原町の西村方で。西村は今の家の家主である。下鴨

を離れた暫くの間に、今は既になき人岩田君など、共同生活をしたのは思ひ出の種である。上賀茂で鹿子木員信氏が同志社から慶大の方へ轉ぜられたので、其あとを借りて門の標札に Rakusker と書いて置いた。附屬の生徒がそれを見てノートに書きつけ、小檜山といふ英語の先生をいぢめたものだ。先生一晩かゝつて英獨佛の字引を片つ端から引いたが、そんな字は見當らなかつた。なに、それは『樂舎』といふのだよと小檜山君に教へてやつたらば、君等は甚だ怪しからんことをする奴だと怒つてゐた。岡本君(註・現大阪地方裁判所判事)との萬年床生活といふのは、それから後のことである。

三

今私は京都帝國大學助手である。三月に大學の英法科を卒業するとす

ぐに大學院に入る筈であつたが、給費研究生たるの関係上、兎に角助手といふことになつた。しかし、實質上は大學院の學生であるので、指導教授も研究題目もきまつてゐる。菅原春二先生について、私法(民法商法)特に私法原理を研究することになつてゐる。しかしまだ何もやつて居ない、お恥かしい話であるけれども。大學の方の用事は皆無であるが、自分の勉強の都合上、大抵毎日大學の研究室に居る。私は私法研究室の一角にデスクを置いて貰つてゐる。

大正八年に大學へ選科で入學し、九年に入學檢定試験に合格して本科に編入して貰ひ、大正十年に高文行政科試験にパスし、本年三月學士試験合格證書を貰つて、どうかか大學を出たのである。試験を受けてゐる時は、なんでも試験に落第せぬ様にと奮發するが、全然試験といふものがなくなると、どうも怠りがちになるのは淋しい。

卒業以來附屬小學校に居た私は、全然初等教育界の荒浪なるものを知らぬ。子飼ひの内辨慶であつた。大正七年三月所謂秀才教育學級が出来たので、そちらの方へ移つた。名目だけは教諭兼任であつたが、其實は四人の訓導のドン尻につけ出されたのである。其時の訓導は、一人を除いて皆帝大に學んでゐる。(註、現に、理學士廣島高師教授、文學士大谷大學教授、經濟學士富士紡績會社員)赤い血潮の高鳴る私達には、秀才の子供が自分より偉くなつて行くのを、悦んで味つてゐるだけの餘裕がなかつたのである。恐ろしいのは後から來る者である、特に子供である。かくて私の公生涯の第一期は大正八年十月十一日を以て終つた。第二期の第一歩は既に印せられたが其のたどたどしい足どりには自分ながらはらはらしてゐる。(註、大正十三年一月、東北帝國大學助教授に任ぜられた。)これが公的生活の私の現在の姿である。

大正一一、一二、師子吼會誌所載

三 京都を憶ふ

京都はなつかしい。しばらく、そのなつかしい京都の思ひ出話をさせて貰ひませう。

明治四十年の一月であつたかに、はじめて私は京都の土地をふんだのです。勘定して見ると丁度十七年前に當ります。たしか、京都驛は七條驛といつて居たと思ひますが、その七條驛で下車して堀川中立賣まで電車に乗り、そこから歩いて大宮通り寺之内上る近江屋といふ宿屋へ到着きました。近江屋といふのは、今の中川宗太郎さんのうちです、しかし、其時はちがふ人が經營してゐました。その宿屋を周旋して呉れたのは、

三 京都を憶ふ

今の前田君當時の工藤清太郎君といふ私の小學校の先輩で、京都府師範學校のたしか二年の生徒でした。私の京都へ来た目的は、京都府師範學校の入學試験をうける爲めだったのです。

近江屋には澤山相客がありました。皆同じ仲間です。當時はまだ女子師範が獨立しない前でしたから、女の受験生も大勢まじつて居て、今から考へると一寸張合のある氣持でした。丹後の方からの受験生たちが、男も女も共に親しさうにしてゐるのを見て、一種異様の感にうたれると共に、淡い美望をも感じたやうに思ひます。勿論女の受験生には父兄が附添つて来てゐました。着いた日、師範學校へ行つて外観を眺めました。黒い柱の門は平凡だなと思ひました。馬車廻しの立派な玄關では、お堂のやうだと感じたやうに思ひます。あくる朝は早くから汽笛が鳴るのでビツクリしました。何分田舎者ですから工場の汽笛などは聞いたこ

とがなかつたのです。

第一次の試験は三日間であつたと思ひます。お晝には宿屋から暖い御飯を持つて来て貰つて食べました。今とちがつて、世間一體にさうく受験熱が神経的になつてゐませんでしたから、そんなにクヨクヨした氣持ではありませんでした。デモ、女の受験生が最先に答案を出して行つたりすると、情けないやうな氣がしました。忘れられないのは算術の試験の時でした。私がまだ半分位しか出来てゐない時に、答案を出してサツサと出て行く女の受験生のあつたことです。あとで聞くと、それが満點だつたさうです。不幸にしてその人の名前を聞き洩しました。

試験が済んでから、お天氣であつたにも拘らず、高下駄をはいて天神様へ工藤君に連れて行つて貰つたのですが、工藤君は「何だい田舎者らしい風をしてあるく」といつて笑ひました。第一次試験に合格し、次い

で第二次試験に出頭して、また何日かを京都で暮しました。その時は大分馴れても有り、且は一ぺん合格したのだと思ふ天狗も手傳つて、さうオヅ／＼ともししてゐませんでした。口頭試問のときに、狐にだまされたことがあるかと聞かれて、眞面目に『ありません』と答へたことを覚えてゐます。今から思ふと、本校の貴賓室が試験室で、あの庭に面した廊下が待合所でした。口頭試問といふのが一番恐ろしかったのです、やつと合格した通知を貰つて、大いに得意になりました。よくは知りませんが、三倍位の應募者はあつたのでせうか。

寄宿舎は第一寮の第二室で、今の小山源一君、當時の田中源一君が室長様でした。小山君は今伏見で醬油屋をして居られます。柔道場で整列してゐると、田中君が迎へに来て呉れて、あとで室員に紹介して呉れました。新入生の相棒は、今の宮津校の首席訓導の四方隣十郎君です。一

室八人で各學年二名づつがきまりでした。

明治四十年七月何日であつたか、正午前に体操をしてゐると、小使が紙を持つて來ました。それを工藤徳行先生が御覽になつて、級長の山本君と呼ばれました。山本君がその紙に目を通して読みはじめました。それは退學命令の呼び出し状なのです。ポツリ、ポツリと読んで通計十二名也、右の者直に校長室に來れといふ意味でした。呼ばれなかつたものは合格なのですが、自分の横に現に整列してゐる友達が、今日から學校を追ひ出されるといふのですから、誰も口を利く者とはありません。体操の時間はそれぎりで解れ！。つまり四月から七月迄一學期間は、假入學といつて御目見得の時代なのです。私は幸に本入學を許可すといふ書付けを貰つて、意氣揚々として夏休の歸省の途につきました。

假入學落第の名前を讀上げた山本君は、惜しい事に其の夏休みに大堰

川で溺死しました。

明治四十三年九月、私は附屬小學校で實地に授業の稽古をすることになったのです。發表になつた學級配當を見ると單級。尋常の一年から六年までを、一つの教室に入れて教育するといふ特殊學級なのです。相教生は、宅間勝一君と竹井源之助君とでした。指導役の訓導は、岩田幸三郎君で、今は既に故人となつて居られます。岩田君は才の人でもあり、腕の人でもあつたのに、和歌山縣の郡視學を最後として、惜しくも流感の爲めに逝かれました。

そのうちに秋の運動會が來ました。四年生が、自分の學年の應援の爲めに、附屬小學校の兒童を使つて大いに氣勢をあげたのはよいが、あとで散々主事からお目玉をいたゞきました。當時の井上秀一君、今の佐々

木秀一君が級長で、私が副級長であつたものですから、二人が代表して叱られました。デモ、代表して叱られるといふことは、餘りピンと來ないものだといふこともわかりました。時の主事は、今の東京高等師範學校教授で附屬小學校の主事を兼ねて居られる日田權一先生であります。

越えて翌年、三月に卒業するのだといふ春には、殆ど毎日のやうに上賀茂の橋詰の二葉餅へか、大宮寺の内の蕎麥太へか行きました。上賀茂から今宮を抜けて船岡山の方へ出て學校へかへるのは、私共の散歩のノーマルコースでありました。時には京極の方へも行きましたが、活動寫真なんどいふものは、あるにはあつたやうに思ひますが、殆ど願ひませんでした。主義の上から見なんだのではなしに、別に興味がなかつたからでせう。又、歸りでも電車に乗ることは減多にありませんでした。乗つてはいけないと誰からも聞きませんでした。乗らないものだときめ

てかゝつてゐたのです。併し、歸省する時には乗るべきものだと決めてゐました。可笑しいといへば可笑しいのですが、當時はそれを不思議だとも何とも思つちやるませんでした。

卒業の夜、即ち明治四十四年三月三十一日、後の大阪地方裁判所判事岡本薫一君と共に、新調の背廣を着て寺プラを試み、錦魚亭で氷を食ひました。氷料理は、前から京都は外の都會よりは發達してゐたやうです。外套を着て氷を食つてゐるのですから、肉體が氷を要求するのではなくて、氣持がそれを望んだのでせう。通がつてゐたんですネ。

一人前の先生らしい様子をして、毎日下鴨の出雲路橋を渡りました。私達が冬の寒い日に土手に植えた櫻や楓も、殘虐な手からのがれた分は、

ずん／＼大きくなり行くのを感じました。土手の松は別に大きくなるやうにも思ひませんでした。延びるといふことは、まだ偉大でないといふ徴表ではないでせうか。過去の自分より、現在の自分の方が偉いと思ひ得る間は、まだ弱少たるを免れないではありませんまいか。

賀茂川には水があつたことは殆どありません。上賀茂あたりまで行くと水があるのに、下鴨あたりでは地下水となつて流れ、いはゞ下鴨を浮かせてゐるやうな容になつてゐるのです。「上賀茂は賀茂といつて、下鴨は鴨といふのは、いつでも水に浮いてゐるからだ、見よ、鞍馬口に接する方には大堤防があるのに、下鴨側には何もないではないか、それでも下鴨が洪水に侵されたことはないのだ。」と、よく下鴨の物識りから教へられました。

比叡山を山は紫なりといひますが、下宿の二階から眞面目に比叡山を

眺めた六年の経験からいふと、紫にもなり、茶にもなり、空色にもなり、千種萬色です。紫一點張りではありません。比叡山の絶景は、師範學校の雪隠の窓から見たところだと思ひます。ヤレ／＼これでスツパリしたと腰を伸して、ふと横を向くと、キョトンとして窓の方に向つてゐる比叡山の姿は、私の知る限りのどの比叡山よりも趣きがあります。

御苑内の神々しさは、年と共に其感を新にするが、一番印象の深いのは、家族と共に京都を去らんとする朝まだき、一本の塵もなきやうに掃き清められた白砂を、自動車が這つて行つたときの感じであります。

嵐山では、對岸の黒く見える雑木林の奥行の深さと、龜山公園の赤松の明るさを愛します。わけて鉢巻取の遊びは、龜山公園の印象を一層深くします。

祇園の夜櫻は俗悪にはちがひありません、京極も餘り高尚ではありません。

すまい。閻魔堂の狂言に至つては、かなり卑猥なものです。併し、私はその何れをも好みます。私には、清冽でなければならぬといふやうな感情の持合せもなく、且は、俗悪は俗悪なりに見所があると思ひます。それですから今でも、新聞に載る小説や、講談は、何でも構はず讀んでゐます。つまり人間がゾンザイに出來てゐるんですね。

足掛十七年の京都での生活で、私の最大の收穫は人間の魂といふものを森貞亮先生によつて得、さびといふことを京都の自然から得、友情を明治四十四年師範卒業の同期生諸君から得、慧智を能勢、山上、長谷川、藥師寺等の諸君から得、刺戟を敬身同窓會員諸君から得たことであります。凡ての偉大なる感化がそれである如く、森先生も京都も能勢君等も同窓會員諸君も、恐らくは私に對して何も影響は與へないと思つて居ら

公民教育私論

れるでせうが、その何とも思つて居られないところが、本當に貴いのであります。別にあらたまつて御禮を申さないのは、申すに言葉がないからであります。

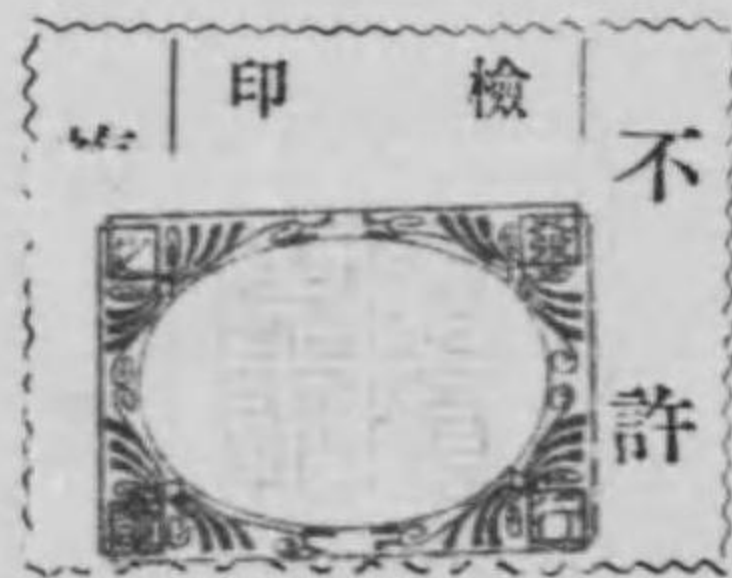
私は常に京都を憶ふ。憶ふ私の方が、或は、憶はれる京都よりは幸福であるかも知れません。

(大正一三、一二、經の實所載)

大正十五年六月十五日 初版印刷
大正十五年六月二十日 初版發行

公民教育私論〔奥付〕

定價金貳圓二拾錢



著作者 廣 濱 嘉 雄

發行者 藤 原 惣 太 郎
東京市京橋區入舟町五丁目一番地

印刷者 藤 原 久 治
東京市芝區宇田川町十番地

發行所

東京市京橋區入舟町五
番 振替東京一八五一三番

明治圖書株式會社

賣捌所

東京 林六合館 大阪 柳原書店 名古屋 川瀬書店
久留米 菊竹金文堂 佐賀 大坪惇信堂

(製本部……關根・中條製本)

(所刷印社星七二第 部刷印社會書圖治明)

終

明治圖書會社出版